

やちぐみ

桜井 善雄



さくらい よしお
1928年長野県生まれ。
1948年上田繊維専門学
校卒業。信州大学助手を
へて信州大学教授（繊維
学部）。農学博士。現在、
日本陸水学会評議委員ほ
か多くの審議会委員など
を務める。
著書に『水辺の環境学
—生き物との共存』、共
著に『自然保護を考える』
ほか多数。

「やちぐみ」はクロミノウグイスカグラの実のこと。最近栽培もされて、ハスカップという名で売られている。

話は太平洋戦争の末期、昭和十九年頃の阿寒川のはとりの農家の生活から。当時は農家の暮しも農作業も、この童話のように、まわりの原野や阿寒川の自然と、文字どおり一つになって営まれていた。ただし、話の設定には、かなりフィクションがある。昭和三十三年の作。

このあたりも、湿地の原野は干拓されて耕地になり、石炭を運んだ鉄道もなく、自動車道や空港が整備されて、すっかり様子が変わってしまった。

阿寒川が、太くなり細くなりしながら、あるところではちよっとして砂浜をひろげ、あるところではけわしい崖をつくりながら、曲りくねって流れて行きます。

ここは釧路のまちから、雄別の炭鉱へ通う汽車にのって、一時間ばかり奥へ入ったところ、やち坊主がよきによき立っている湿地の原や、さるおがせのまきついたはんの木や、ひろいひろい島や、夏のはじめになるといろいろな草の花がいちどに咲きそろそろ平らな牧草地などのまん中です。

そこに、はっことれつこのいえがあります。はっことれつこは小さな姉妹です。そうですね、はっことは七才、れつこは四才くらいでしょうか。

はっことれつこのうちには、ちぢ（おぢいさん）とあつちゃん（おかあさん）がいます。

ちぢはあまりしゃべりません。いつもむつつりとだまって、せつせと仕事をしてゆきます。いえのまわりや、島の間の道を歩くときも、たいてい下をむいていますが、はっことれつこに行き合ると、ちよつと顔を上げて「ほほう」といってにっこりします。あつちゃんはよくしゃべります。はっことれつこに、こまごました世話をやくのも、たいていあつちゃんです。あつちゃんは、はっことれつこの身のまわりにおこることに、いつも気をくばっているようです。

はっことも、れつこも、どちらかといえば、あつちゃんのことよりちぢのいうことをよくききわけます。ですが、どちらも同じくらい大すぎです。なぜつて、れつこには誰もいないのですから。

ちぢの一人むすこだった、はっことちぢのお父さんは、はっことがやつと三つになり、れつこはまだあつちゃんのおなかの中にいるころ、戦争に行っていました。ですから、れつこはお父さんのことをちよつともしっていませんが、はっこの方は少しおぼえています。

お父さんが兵隊にゆく日に、はっことが眼をさますと、うす暗いうちから村の人がたくさん集っていて、とてもにぎやかだったこと、長い白い旗を立てて、うたをうたいながら行くみんなの行列といっしょに、あつちゃんの背中にしっかつかまりながら、冷たい風のふく阿寒川の崖つぶちを通って駅まで行ったこと、などをおぼえています。

はっことちぢのお父さんは、それから間もなく、一度だけ「元気でやっています」という手紙をよこしたそうです。しかし、その次に来た手紙は、もうお父さんの書いたものではなくて、お父さんは戦死し

た、というしらせだったということです。

はっこにも、れっこにも、まだお父さんが死んだということがあることかよくわかっていません。まだ二人とも小さいし、それに、お父さんの死んだことを、自分たちの目でみていないのですから、むりもないことです。

とにかく、そんなわけで、はっことれっここのうちにはお父さんがいないのです。

さて、夏のさかりのある日のことです。

お昼のごはんがすむと、ちぢはいつものように、地下たびをはいたまま上りかまちに仰向けにひっくりかえって、しばらく休んでいましたが、

「あ、あ、あーあ」

と大きなあくびを一つしておき上ると、又長い柄のついたホーをかついで、豆の畠の方へ出かけて行きました。

あっちゃんも、ごはんの後の汚れ物を洗う音を、流しの方でかちかちさせていましたが、窓の外にちぢのかついでゆくホーが通りすぎるのを見ると、急いでそれを片付けて、ちぢの後から畠の方へ行ってしまうしました。

はっことれっこは、さつきから庭に出て、硬くふみつけた土の上に、ろう石で線を引いてあそんでいましたが、あっちゃんが畠の方へ行ってしまったのを見て、急に思い出したように、

「れっこ、やちぐみとりさいくべか」

とはっここんなことをいいました。

「うん、いくべ」

れっこはすぐ返事をして、もうずいぶん小さくなったろう石を大事そうにポケットにしまいました。

春、雪がとけて、地面がようやくやわらかくなっ



佐々木 栄松 作・枯 牧 舎

た頃、ちぢとあっちゃんが、毎日朝早くから、夕方お日さまがずつとむこうのはんの木の森のかげに沈んでしまつて、もうあたりがうす暗くなる頃までかかってまきつけたじゃがいもが、濃い緑色の芽を出して、そのちぢくれた葉が、小さいれっこのひざのあたりまでのびてくると、うちの前のはんの木の林の中や、やち坊主のいっばい立っている牧場の中で、やちぐみの小さい紫色の実が、あちらこちらで熟れはじめるのです。

二人は小さな手をつないで、ぎらぎら輝いているお日さまの光をあびながら、牧場の境の、水がちよろちよろ流れている小川の橋を渡り、牧場の入口の柵をくぐって、中へ入って行きました。

牧場の中の日によく当たるところには、クロバリの花がまっ白な敷物のように咲きつめていました。そんなところを、二人はつないだ手をちぎれるほど振つて、口から出まかせにでたらめなうたをうたいながら、歩いて行きました。

「あっちゃんーん」

二人が声をそろえて呼ぶと、家の裏のひろい豆畠で、ちぢといっしょに草けずりをしていたあっちゃんが、こつちを向いて手をあげてくれました。

二人は、もうすつかりうれしくなって、「あっちゃんにも、やちぐみとってきてやるべな」

「ちぢのものー」

と大きな声で、口々にこんなことをさげびながら、林の中へ入って行きました。

やちぐみの木は、高さがほぼ一丈くらい。つつじに似ていますが、もう少しひよろひよろしています。それは、はんの木の林の中にも、それから、広い原っぱのやち坊主の頭の上にも、ところどころに生えています。けれど、れっこもはっこも背が低かった

し、また二人の背丈より高いやち坊主もいっばいありましたので、始めのうちはなかなかみつけることができませんでした。

「はっこ、うちさかえるべ」

林の中で、二人はやち坊主の間を生けんめい歩きまわってさがしましたが、ちっともみつからないので、れっこは少しさみしくなっていました。

「もつとむこうさ、いってみるべ」

といて、はっこが先に歩き出したので、れっこも仕方なし後をつけてゆきました。

少しゆくと、はんの木がまばらになって、あたりが急に明るくなり、やち坊主も少なくなって、ずいぶん歩きよくなりました。

もうそれだけでもうれしかったのですが、そこには、まだ誰も手のつけてない、紫色の実のいっばいぶら下ったやちぐみの木が、あっちにもこっちにもたくさんありました。

れっこもはっこもすっかりれしくなっていて、急いでそっちの方へとんでいって、夢中になってそれをとりはじめました。日当りのよいところでしたので、どれも、みんな熟れていて、木の根っこをつかまえてゆすると、ばらばらと落ちてくるくらいでした。気持のよい風がそよそよと吹いてくると、はんの木の葉っぱも小さな白かばの木の葉も、いろいろなかっこうをして、きらきらと輝いています。

れっこはまあある顔のまあるい目玉をきよろきよろさせながら一生けんめい背のびして、葉のかげにかくれている紫色の小さな実をさがしてはつみとって、あとからあとから口に入れました。はっこも、一粒口に入れるたびに、そのすっぱいのに顔をちよっとしかめながら、右手と左手でかわるがわる口の中

にはうりこみました。

しばらくすると、二人とも、食べるのはもうたくさんになつてしまいました。そして口びるも、指の先も、ずいぶん紫色に染まりました。

それから二人は、今度は前よりゆっくり、あつちの木へいったり、こつちの木へ来たりしながら、とつたのを胸の両側にある小さなポケットに入れはじめました。

「れっこ、ちぢのぶん、とってけれな」

「うん、そんじや、はっこ、あつちやんのぶん、とんの」

「うん」

ポケットはほんとうに小さかったのに、やちぐみはたくさんありましたので、しばらくとると、もういっばいになつて、入れるところがなくなつてしまいました。

「れっこ、はやくあつちやんとこさいくべ」

はっこは、自分でとつたやちぐみをあつちやんにやることを考えると、ともうれしくなりましたので、両手をばたばたとふり、足までとんとんさせながら、れっこの方を向いていきました。

ひろい島の中でホーを動かしながら、シャリン、シャリンと草をけずっているあつちやんのところへ早くとんでいって、

「あつちやん、やちぐみ、け（食べなさい）。あの林あるべ、あのむこうでな、いっばいあるとこ、みつけたんだぞ」といいながら、あつちやんの大きな手の上へ、自分の小さな手から、紫の小さな粒をぽとぽとおとしてやりたかったです。

れっこもポケットも、もうずつと前からいっばいでしたので、

「うん、かえるべ」

と返事をして、両方のポケットを大事そうに手でおさえながらずはっこの方へかけてきました。

お日さまはまだ、はんの木の上の方で輝いていますし、ポケットもやちぐみの実でいっばいです。二人はほんとうにうれしそうでした。またいつものように手をつないで、残った方の手でポケットをおさえながら、家の方へかえろうとしました。

けれども、はんの木の林の中へ入ると、来るときはやちぐみを探すのに夢中で、帰るときのことなど少しも考えていませんでしたので、どこを通過て来たのか、すっかりわからなくなつてしまいました。

はっこが背のびしてみても、まわりのやち坊主が高いうえに、いっばい草が生えていましたので、はんの木の林をすかしてみえるおうちの屋根も、はっこの眼には入りませんでした。

「れっこ、道どこだべか」

れっこも小さな背を二、三寸のばして見まわしましたが、ただ草と木がみえるだけで、おうちの屋根などともみえません。まだそれでも二人は、道がわからなくて悲しいことよりも、やちぐみをいっばいとつたりれしきの方が大きかったものだから、また手をつないで元気に歩きはじめました。

けれども、いくら行っても、うちの近所でいつもみなれているような景色になつてきません。二人はすっかり反対の方向へ行つてしまつたのです。

そしてやち坊主のぎっしり立った、ひろい原っぱへ出てしまいました。

そこは、毎朝、ちぢが牛の乳を荷車につんで駅まで運んだ後で、馬を放しにくる。うちの牧場だったのですが、はっこもれっこも、何時もとちがったところを通過て来たものだから、そんなことは少しもわかりません。れっこがさみしくなつて、はっこ

の顔をみあげながら、

「はっこ、はやくうちき、かえるべな」

といいましたが、はっこは何とも返事をしませんでした。そうです、はっこだってどうしていいかわからないくらい、すっかり困ってしまったのです。

はっこはそれでも、立ちんぼしていると、いまにもれっこが泣き出しそうなので、その手をぐいぐいひっぱりながら、野原のまん中の方へ進んでゆきました。やち坊主の間の草の株につまずきながら、めちやめちやに歩いてゆきました。

やっと原っぱのまん中の辺まで来ましたが、まだまだおうちは見えません。背のびしてみると、ずつとむこうに牧場の柵が小さく見え、そのずつとずつとむこうには低いお山が、うす青くかすんでいます。

こんどは、左手の方へあるきはじめました。左手のむこうにははんの木の林がみえます。ところが、その林へ行きつかないうちに、足もとの地面が急にぐじゃぐじゃしてきて、前へ進めなくなっていました。やち坊主が少なくなったかわりに、どぶどぶした赤茶色の水たまりがいっぱいあり、水の上には鉄さびのようなものがきらきらういています。

水たまりのむこうでは、草むらの中から、枯草色をした小さなものがちよつととび出して、またすつんと、草むらの中へとびこんでしまいました。きつねかな。

はっこはそれを見ると、ぎくつとして、いそいでれつこの手をひっぱって、もときた方へかえりはじめました。

れっこは、はっこに手をひてもらっていても、ぐじゃぐじゃした土の中へ足をつっこんだり、草の根につまずいたりして、なんでもころびそうになりま

す。はなみずを一生けんめいすりあげながら、とさどきひくくひくくつとやっています。もうすぐ泣き出してしまいそうです。

それでもはっこは、何にもいわないで、おこったような顔をして、れつこの手を力いっぱいひっぱって、めちやめちやにあるきました。そうするよりほかに、やりようがなかったのです。

それから、どれほども行かないうちに、れっこはとうとう泣き出してしまいました。はっこの手をふりはなして、

「あっちゃーん」

と大きな声で泣きながら、しゃがみこんでしまったのです。

れっこが泣き出すと、はっこだってもうどうしてよいかわからなくなっていたものですから、つりこまれていっしょに泣き出してしまいました。

広い野原の中や、山の中の誰もいないところで道に迷ってしまったら、大人だってたまらなくさみしくなるものです。れっこもはっこも、ポケットの中の大事なやちぐみのことなど、今はもうすっかり忘れてしまつて、ちぢやあっちゃんのみえるところへ早くかえって行きたい気持だけでいっぱいです。

二人はやち坊主の間で、ずいぶん長い間大きな声を出して泣いていましたが、そのうちに声も出なくなつて、しゃがみこんでしまい、ただひっくりひっくりやっているだけでした。

お日さまは、うちを出たときよりは半分西へ傾きました。それでもまだあつたかい光をなげてくれました。しかし、気持の良い風もやち坊主の頭の上の草をゆらゆらゆすりながら吹いていましたので、泣くだけ泣いた二人は、涙とやちぐみの紫色で顔をぐしゃぐしゃにしたまま、いつのまにかすやすやとねむり

はじめてしまいました。

お日さまが、ひろい野原や森のずつとむこうに見える、うす紫の低い山の上にかかると、はんの木の影も、赤だもの木の影もずつと長くのびて、その先の方は、すぐその辺にはみえなくなつてしまいました。

その頃になると、山の炭鉱から釧路のまちに石炭を運ぶ最後の汽車が、ポーンと長い汽笛をならしながら、こつとんこつとんしずかにくだつて行きます。

ちぢ達も、村の人達も、まきつけとか、とりいれとかの特別に忙しいときのほかは、この汽車が通るとみんな仕事をしまつてうちへひき上げるのです。

あっちゃんは、それからすぐ二頭の牛の乳をしぼつて、うちの前の小川に冷してから、夕はんの仕たくにとりかかります。ちぢは明日の朝早くまた牛乳を馬車につけて駅まで運ぶために、牧場へ馬をつれに行くのです。

「ちぢ、はっこらどうしたべな。さつきやちぐみとりさ行つたけど、まだ帰つて来ないべ」

ホーをかついで、島からうちへ帰つてくる途中で、あっちゃんはちぢの方をふりむいてこういいました。ちぢは何とも返事をしませんでした。心の中では、ほんとうに心配だったのです。

「な、ちぢ、牧場さ馬つれに行つたら、ついでに探してきてくれや」

と、あっちゃんは、長い綱のついた馬のくつわを肩にひっかけて、牧場の方へ出かけてゆくちぢに、乳をしぼりながらたのみました。

ちぢは、はっこ達が入つて行つたはんの木の林の、ずつと右の方の道をまわつて、いつも馬が草をたべながらあそんでいる原っぱの方へ歩いて行きました。れっこははっこは、そこから少し入つたところの

やち坊主の間でねむっていたのですが、ぢぢは気がつきませんでした。ぢぢは原っぱをずっとみわたして、ずっとむこうの、はんの木が五、六本かたまって生えているかげに、うちの馬がいることがわかるとやち坊主をよけたりまたいだりしながら、まっすぐにそっちの方へ行きました。ぢぢは馬にのって探すつもりでした。

ぢぢは馬をつかまえると、なれた手つきですぐくつわをかませて、のっかりました。そして「ほう、ほう」と馬に声をかけながら、原っぱの中をあっちこっち探してあるきましたが、小さい子供のことですから、あんまり遠くへは行かないだろうと思って家の近くのはんの木の林の方へやって来ました。

そして来る時に通ってきた道に出るわずか手前のへんで、ぢぢは馬の上からはっこたちをみつけたのです。

はっこもれっこも、さんさん歩いて、すっかり疲れていたものですから、夕方になったのもしらないで、まだぐっすりねむっていました。

ぢぢが低いこえで「おーっ」といって馬の手綱をしめると、馬はまるでぢぢの安心したのがわかったように、はな先を夕方の空へ高くふり上げて「ひひーん」となきました。

はっここれっこは、ぢぢの馬がいないときから、きつと一ばんいい着物をきて、ぢぢの馬車にのせてもらって、隣の村のおぼさんのうちへあそびにゆくときの夢でもみていたのかもしれない。

ぢぢがはっここれっこをゆすって起した時、二人の胸のポケットの大事なやちぐみは、もうすっかりつぶれてしまって、ポケットのまわりは一面に濃い紫色に染まっていました。



佐々木 栄松 作・鹿の沢